

学区点検歩き+防災マップづくりにチャレンジしよう

玉川大学教育学部 教授 寺本 潔

1. 74%の生活時間にこそ防災力を

防災教育は、教科化は無理としても、今後社会科学や総合的学習でぜひ、重視して取り組みたいテーマである。しかし副読本やパンフレットだけで教える一律の防災教育ではかえって教師や児童の負担感を増すだけになるだろう。学校の位置する土地の条件（海拔や市街地化の程度、地盤の状態・水辺からの距離）や学校の校舎・児童数の違い、避難場所までの時間距離、地域住民の関心度の違い等によって大きくその内容は異なるからだ。防災教育は、その学校の特色に見合った「自校化」が必須であり、本稿で紹介するマップづくり（全6時間）も各校でくふうして取り組まなければ効果は薄い。例えば、低地にある学校では近隣の建物倒壊を、山間部にある学校ではがけ崩れを想定させるなどが考えられる。

ところで、児童の1年間の全生活時間の中で、学校で過ごす時間は、多く見積もって26%といわれている。残りの74%の時間は、家庭や地域で過ごす時間。だから、自助を基本とする防災は、「1人で家にいるときや近所で遊んでいるときに地震や津波が発生したら、どうするの？」を問う授業にしくはなくては確かな問題解決学習にならない。

2. 学区点検歩きのポイント

地震や津波、洪水など自然災害に学区はどのように見舞われるのか。点検歩きの前に意欲化と視点共有のため1授業時間を確保したい。下の写真は、筆者が昨年12月に沖縄県のある小学校第5学年学級で実施した津波防災授業のようすである。児童に災害時での市街地の変化や水位が高くなった場合の避難の仕方などを考えさせ、キーワードとして、「とうふてい（倒・浮・低）」を提示した。つまり「倒れてくるもの」と「浮くもの」「低い地面」の三つである。校外指導では4～5人で班を構成させ、各班に引率（保護者）を1人お願いする手配が必須。調べる学区をいくつかに分割し、児童にカメラを持たせて、ブロック塀や石の鳥居、エアコンの室外機、電柱、看板などの「倒れてくるもの」を、さらに津波や洪水で流されて人にぶつかるプロパンガスや自家用車、材木などの「浮くもの」、駐車場や地下道（とくに、アンダーパスとよばれ立体交差で掘り下げ式になっている下の道路）、公園等の周りより少し「低い地面」や電柱にはられている標高板も撮影させた（2授業時間必要）。これらを現像し後に地図にはるのである。



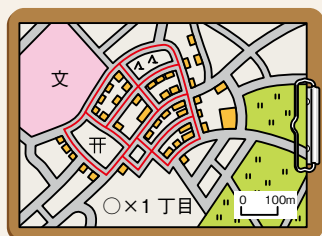
写真① 点検歩き直前の授業場面（授業者は筆者）
 写真② 津波から避難する際の階段を撮影する児童
 写真③ 撮った写真ははりつけた防災マップ
 写真④ 防災マップを発表する児童

3. ベースマップのつくり方

マジックで学区の地図を模造紙に拡大したベースマップの作成がポイント。点検歩きで使用した市街地地図は小さいので、それを模造紙大に児童

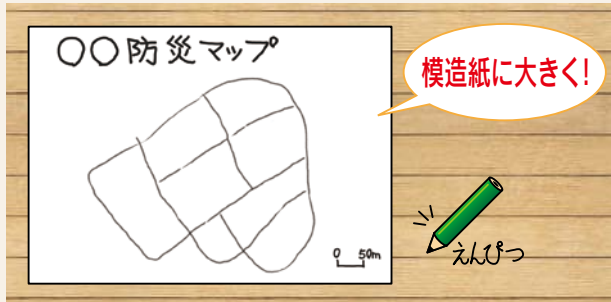
の手で拡大させる指導が欠かせない。教師が大型複写機などを使って拡大した地図を準備するのではなく**児童につくらせる**のが手づくり感と地図への親しみを期待できて大切。順を追って解説しよう。

- 1 学区点検歩きに使用した市街地地図に道路の軸線を赤色で引かせる。

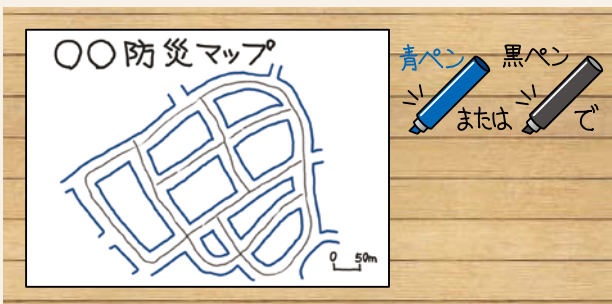


地図にかきたい範囲の道路をなぞろう！

- 2 赤色の線のパターンを大きな模造紙に鉛筆で拡大して模写させる。その際おおよその縮尺も入れておく。



- 3 鉛筆線で描かれた線を中心に、道はばを肉づけするように太字マジック（黒か青）で引かせる。



- 4 最後に消しゴムで鉛筆線を消すように指示すると拡大された学区地図ができあがる。



これをベースマップとして使うのである。撮影した写真をはり、色紙に気づいた点を書き込めるとめだつてよい。もちろん、タイトル文字や吹き出し、地図記号の凡例もくふうさせると見栄えがグンとよくなる（作図に2授業時間必要）。

4. 防災マップの発表会

でき上がった防災マップは、「わかったこと」と「くふうした点」を発表させる。地図を使って具体的な場所をイメージさせつつ、災害時の避難を想定できるので貴重な教育機会になる。先日実施した発表会では、「地震で崩れてきそうな壁や

看板がありました。」「通りの電柱にはってある標高板の写真を地図に並べてみたら、西に行くほど低くなっていることがわかりました。だから、西側から水が襲ってくると思います。」「もし、津波がやってきたら、私の家からはこの階段を使ってビルに駆け上がります。」「みんながこの地図に注目するように“津波怪物ザードン”を書きました。」などといったユニークな内容となった。従来型の大人から一方的に提起する「脅しの防災教育」でなく、思考力を高め「自分ごと」に引き寄せた「学びとる防災教育」となった。

命を守る防災宝箱



- ①防災教育は一律でなく、各校の特色を生かした「自校化」が効力を発揮する。
- ②学区点検歩き+防災マップをセットで実施しなければ、「自分ごと」に引き寄せられない。
- ③「脅しの防災教育」から「学びとる防災教育」へ転換を。